

ほんばこ



No. **61**

日本教育会館 附設 教育図書館通信

復刊第 61 号 (通巻第 77 号)

2020 年 3 月 26 日発行

〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋 2-6-2

日本教育会館 5 F

教 育 図 書 館

Tel/Fax : 03 (3230) 4437

Mail : toshokan32304437@jec.or.jp

<http://www.jec.or.jp/tosho/>

● 目 次 ●

・ << 図 書 紹 介 >>

『原発は日本を滅ぼす』 緑風出版 2 p

青谷知己・小倉志郎・草野秀一・後藤政志・後藤康彦・山際正道 [共著]

紹介：薄田 綾子

『画家たちの戦争責任』 梨の木舎 北村小夜 [著]

紹介：大森 直樹 4 p

『戦後女性教員史』 六花出版 跡部千慧 [著] 紹介：教育図書館 5 p

・ 最近の受入図書 (2019年11月～2020年2月受入) 6 p

・ 教育図書館のご案内 8 p

《図書紹介 1》



『原発は日本を滅ぼす』

2020年2月発行

青谷知己・小倉志郎・草野秀一・後藤政志・
後藤康彦・山際正道 [共著] 緑風出版

広島のとある場所で黄色い表紙のこの本を見ました。隣には「ぼくも書いてるんです。」と以前お世話になった方がにこやかに本を手にして立っています。黄色は目を引く色、つい目を留めてしまっ、しかも著者（の一人）にすすめられては買わないわけにはいかず……。

でも、おもしろい本でした。原発本はこれまでもいくつか読んできましたが、わかりやすく書かれていて、しかも福島原発の事故原因や被爆の状況、事故後の人体への影響についてだけではなく、ニュース等であまり報じられない自然にかかわる事故後の現状と今後について、作業員の過酷な労働実態、土壌汚染、汚染物質の処理方法、放射能、放射線について、電力について、放射性廃棄物について、学校で子どもたちに配られている副読本の是非について、などを6人の著者が書き分け、批判だけに終わらず最終的には再生可能エネルギーへの移行をはかり持続可能な社会をめざす方向性が示されています。少し難しい箇所はありますが、中高生から読める内容です。この本で原子力や放射能、放射線について知り、知識を深めていく入口になるのではないかと思います。また、ぜひ読んでもらいたいのは学校の先生です。「原

発は安全」と子どもたちに教えてきた、今も教えている先生に読んでもらいたい。本に書かれていることの方が間違っている、という再認識もあるでしょう。それはそれで、本の間違った箇所について根拠を示して子どもたちに説明できればいいことです。この本を読んで子どもたちに正しいことを教えられているだろうかと疑問を感じれば、それは著者の思う壺かもしれません（笑）。改めて、正しい知識を子どもたちとともに学ぶ好機になればと思います。わたし個人としては、（さまざまな事情で難しいことはわかっていますが、）著者（のみなさん）から「もっと知りたい人はこの本がおすすめ」などの発展があってもよかったですのではないかと思います。

「日本ではいずれ大きな地震が起きます」「富士山はいつか爆発します」子どもころとても怖かった。「いつか」は今日かもしれない。夜の暗いのも怖かった、夜でなくても闇が怖かった。暗闇に何かいるかもしれない、何かあるかもしれない。それは恐怖という名目に見えないもの。正しい知識を得ることで恐怖の正体に近付くことができる、できてきたと思ってきました。でも「正しい」と言われていることが正しくなかったら？

福島原発事故まで「原発は安全」と言われていました。国も偉い学者さんも原子力の専門家も地震の専門家も、多くの人が「事故は起きません」、「事故が起きてみみなさんに危険はありません」、「対策は万全です」と言っていました。多くの人が「偉い人たちが言ってるからそうなんだよ」と思っていました。思っていないでしたか？ 正否の判断はどうしたらいいのでしょうか。

この本は、国などが示している原子力にかかわる記述について、数値を精査し、意図的とも思える情報をただしていく構成で書かれています。著者の2人は元原発の技術者で、あとの4人は元高校教員です。携わってきたからこそその真実と、これから生きる子どもたちに正しい知識を持ってもらいたいとの思いが伝わってきます。正否を判

断する材料の一つになると思います。

本には原子力発電所が「安全保障上非常に危険」と書かれています。立地環境からみても、日本は地震列島であること、原子力発電所は海岸沿いにあることから第2のフクシマがいつ起こってもおかしくありません。その上、発電所はもとより、周辺設備等へのテロなどによる攻撃は容易であり脆弱であることを指摘しています。一方で、原子力発電による現在の電力コスト、原子力発電をやめて廃炉にしていくことでかかるコストについても書かれています。ただ危険だからやめましょう、ということは簡単です。やめたらどうなるか、数値をもとに検証する。そこに「正しい」根拠があるのではないのでしょうか。依然として原子力発電を国のベースロード電源に位置付けている日本とは異なり、世界有数の工業国ドイツではフクシマの事故後、すべての原子力発電所の廃止を決め自然エネルギーへの転換をはかっています。将来にわたる人の命を守る政策に舵を切っているのです。

本は楽しいもの。解答をくれるときもあれば疑問の種を受け取ることもあります。わたしの前を一時通り過ぎる文字ですが、いつか「あの時読んだあの本にあんなことが書いてあった」とどこかでひょっこり顔を出すかもしれません。それが原子力発電所の構造かもしれないし事故後を生きる草や木、イノシシや昆虫、汚染された土壌、家の電気料金、未来に残す放射能のごみ、原子力の危険かもしれません。

本を読んでも「原発はいらない」結論にはならない人もいます。多角的に書かれたこの本から正しいと思われる知識を求めて広がっていったらいいなと思います。

薄田 綾子（日教組中央執行委員）

《原発について考えるきっかけとして》

「原発は日本を滅ぼす」を読まれたら、もっと知りたくなる原発のこと……。教育図書館にある幾つかの図書をご紹介します。

『地図から消される街』青木美希著 講談社 2018.3

『福島第一原発1号機冷却「失敗の本質」』NHKスペシャル『メルトダウン』取材班著 講談社 2017.9

『〈決定版〉原発の教科書』津田大介、小嶋裕一編 新曜社 2017.9

『東芝原子力敗戦』大西康之著 文藝春秋 2017.6

『核の戦後史』木村朗著・文・その他 高橋博子著・文・その他 創元社 2016.3

『原発棄民 フクシマ5年後の真実』日野行介著 毎日新聞出版 2016.2

『曝された生 チェルノブイリ後の生物学的市』アドリアナ・ペトリーナ著 粥川準二監修 人文書院 2016.1

『原発 決めるのは誰か』吉岡斉、寿楽浩太、宮台真司、杉田敦著 岩波書店 2015.5

『終わりなき危機』ヘレン・カルディコット監修 河村めぐみ ブックマン社

『震災・原発事故記録集』福島県教職員組合編 福島県教職員組合 2015.3

『原発と戦争を推し進める愚かな国、日本』小出裕章著 毎日新聞出版 2015

『100年後の人々へ』小出裕章著 集英社 2014.2

『放射線はなぜわかりにくいのか』名取春彦著 あっぷる出版社 2013.12

『チェルノブイリの祈り』スペトラーナ・アレクシエービッチ著 岩波書店 2011.6

『世界一わかりやすい放射能の本当の話』別冊宝島編集部編 宝島社 2011.5

《図書紹介 2》



『画家たちの戦争責任 — 藤田嗣治の 「アッツ島玉砕」をとおして考える』

2019年9月発行

北村小夜〔著〕 梨の木舎

1965年に生まれた私が影響を受けてきた著者のなかに、『現代日本教育政策史』を著した海老原治善〔はるよし〕と『ある勤評反対闘争史』を著した内田宜人〔よしと〕がいる。海老原と内田はともに1926年生まれ。19歳で徴兵され、数ヶ月軍役にへた世代。20歳を前に1945年の敗戦を迎えて、戦争の時代への悔恨をかかえながら著作を重ねてきた。

もうひとり名前をあげたいのが北村小夜〔さよ〕だ。1925年11月21日生まれ。1938年高等女学校（高女）に入学、女でも靖国に行くため日本赤十字社救護者看護婦養成所に入所、1943年に東京美術館の国民総力決戦美術展で藤田嗣治〔つぐはる〕（1886-1968）の戦争画「アッツ島玉砕」と出会う。従軍看護婦となり1945年の敗戦を中国東北で迎えた。1950年から1986年まで教員。その北村が、自らの経験をふまえるだけでなく、それを分析の対象にも据えて書きおろし、昨年出版されたのが本書である。私は二読、三読している。

一読してまず印象に残ったのは、北村が「他の着物は大方処分したのに、いまでも筆筒の底に残している」という元禄袖のことだ。高女の卒業が近づいた頃は非常時で、「物資節約が合言葉で着物

の袖は元禄袖か作務衣のような船底袖にしようとするめられて」いた。それならば「縫い込んでおけばいい」「戦争はいずれ終わるのだから」と言った母の言葉を、軍国少女の北村は許せなかった。標準寸法で仕立てられていた着物は国策に沿って元禄袖に変えられた。「愚かな施策」は当時の子どもにどのような影響を与えたのか、動かない証拠の提示である。

本書には方法上の目立った特徴がある。それは、当時の人々の生活の事実を重ねて提示して、そのうえで絵画の影響を明らかにするという方法を選びとっていることだ。これが有効で本書に説得力と類書にはない読みやすさをもたらしている。絵画の人々への影響の分析は、美術史の基本とされている様式論だけでは不足するところがあり、それを本書は乗り越えている。

二読目は、本書の鍵となる言葉である「軍国少女」と「唆〔そそのか〕された」を中心に読んだ。当時の子どもを「軍国少女」へと「唆した」ものが何だったのか、それを第2章から書き出してみよう。北村が小学校入学前の爆弾三勇士、その旗行列。小学校に入学してからの慰問文、明仁誕生のサイレン、その祝賀歌、国定修身教科書の教育勅語。高女に入学してからの青少年学徒に賜りたる勅語、興亜奉公日、神社参拝、日の丸弁当、宮城遥拝、大本営陸海軍部発表対英米宣戦布告、軍艦マーチ、愛国行進曲、宣戦の詔書、大詔奉戴日、時局室、地図、日の丸小旗、元禄袖、八紘一字の塔、海軍予備学生の制服、靖国神社、新聞の「敵機視察」報道、第38回陸軍記念日の撃ちてしまむのポスター。看護婦養成所に入所してからのアッツ島玉砕、連合艦隊司令官戦死、アッツ島血戦勇士顕彰国民歌、海ゆかば、君が代と続いてから、藤田嗣治の戦争画「アッツ島玉砕」にいたる。これだけあるが、実際に子どもを「唆した」仕掛けの一部である。

歌が6件、報道に関するものが6件、行事に関するものが5件、勅語類が3件、施設に関するも

のが3件、服が2件、作文が1件、旗が1件、地図が1件、食べ物が1件、ポスターが1件、絵が1件。

これらの指摘に接することによって、現在の学問が、「音楽」「歴史」「教育史」「服飾」「国語」「地理」そして「美術」といった縦割りに終始するだけは、戦争体制の再現という事態に対応ができないことを、改めて知ることができる。

「唆す」やり方の対極には、自然や社会や人間についての認識をゆっくり総合的に深めていくことがある。別の言い方をすると、生活者が経験知の限界を学問によって補うこととあわせて、既成の学問の限界を生活の必要から乗り越えること、つまり、学問の創造にもかかわることだ。北村は、画家たちの戦争責任を主題とする本書をまとめることによって、こうした生き方を鮮やかにみせてくれている。こうした生き方は、戦後教育においてずっと必要とされてきただけでなく、3・11（東北地震と原発事故）後の小・中・高・大でいま必要とされているものだ。教育界を覆う閉塞感を打ち破る手がかりが本書にはある。ぜひ手にしてもらいたい一冊である。

大森 直樹（東京学芸大学）



1968年に東京で開催された

「日本絵画史に輝く『太平洋戦争名画展』」チケットには藤田嗣治の戦争画「肉迫」の一部が用いられている（本書より）。

《図書紹介 3》



『戦後女性教員史』

2020年1月発行

跡部千慧〔著〕 六花出版

本書は、著者の跡部氏が、2015年度に一橋大学大学院社会学研究科に提出した博士学位論文を大幅に加筆修正したものです。

六花出版の出版にあたり、表紙の写真や裏の育児休暇法のパンフレットなど、教育図書館にある資料が掲載されています。

著者の跡部氏は、大学院生の頃に教育図書館に来館され、女性ならではの視点で戦後の女性教員の歴史を丁寧に拾い、論文を書かれました。

この本では、運動の中心となった高田なほ子氏、千葉千代世氏、奥山えみ子氏の経歴などを知ることができます。時代、運動がリアルに感じられ、俯瞰する力を与えてくれます。

参考文献の一つ、当館にある『共働きの問題』奥山えみ子編（明治図書1971年2月初版）などでは、現在と同じ多忙に悩む教師の声。「忙しいからこそ、みんなでなんとかしなければならないと思う。でも、一刻も早く家に帰りたい。」「せめて、職場の中で話し合っって小さなことでも解決していきたい。」

時代が変わっても、忙しさは変わらない。むしろ、孤独になって一人で抱え込む大変さが増している今日、婦人部のすすめてきた組合運動の大切さを感じます。

（教育図書館 川内）

最近の受入図書

(2019年11月～2020年2月受入)

【日教組刊行物】

- 『日教組政策制度要求と提言』2019～2020年度版
日本教職員組合編 2019.8
- 『第11回 TOMO-KEN (エントリーシート集) (報告集)』第日本教職員組合編
2019.12
- 『実習教員全国集会要項・報告書』2010～2014年度
日本教職員組合実習教員部編
- 『日教組平和集会開催要項』2011～2013年度
2014～18年度 日本教職員組合編
- 『子どもの権利条約から見た日本の課題』子どもの
権利条約NGOレポート連絡会議編 2020.2

【教育総研・県教組刊行物】

- 『「民意」研究委員会報告書』教育文化総合研究
所編 2019.10
- 『能力論研究委員会』教育文化総合研究所編
2019.10

【教育研究全国集会報告書】

- 『日教組教育研究全国集会報告書』第69次 第1
分科会～第24分科会 日本教職員組合編

【文部科学省刊行物】

- 『学校基本調査報告書』令和元年度 文部科学省
著 日経印刷 2019.12

【平和教育】

- 『学童集団疎開の思い出』鈴木啓介著 2015
- 『白樺日誌：改訂版図録』瀬野修著 舞鶴・引揚
語りの会 2019.7
- 『防空ずきんによせて』山形県退職女性教職員の
会 出羽路会事務局 2019.3

【和雑誌】

- 『大原社会問題研究所雑誌』No.711～No.722

(2018.7～2018.12) 法政大学大原社会問題研
究所編

- 『教育』No.852～No.869 (2016.7～2018.6) 教育科
学研究会編 かもがわ出版
- 『月刊社会教育』No.740～No.751 (2018.7～
2018.12) 「月刊社会教育」編集委員会編 国
土社
- 『季刊教育法』No.192～No.195 (2017.3～2017.12)
エイデル研究所編 エイデル研究所
- 『中等教育資料』No.980～No.991 (2018.1～
2018.12) 文部科学省教育課程課編 学事出版
- 『初等教育資料』No.963～No.974 (2018.1～
2018.12) 文部科学省教育課程課・幼児教育課
編 ㈱東洋館出版

【社会・歴史・教育】

- 『歴史としての日教組』上下巻 広田照幸編 名
古屋大学出版会 2019.8
- 『反日種族主義：日韓危機の根源』李栄薫編著
文藝春秋 2019.11
- 『日本の貧困女子』中村淳彦著 SBクリエイ
ティブ 2019.11
- 『知ってはいけない現代史の正体』馬淵睦夫著
SBクリエイティブ 2019.5
- 『ポバティー・サファリ：イギリス最下層の怒り』
ダレン マクガーヴェイ著 集英社 2019.9
- 『孤立する都市、つながる街』保井美樹編著 日
本経済新聞出版社 2019.10
- 『ノモンハン責任なき戦い』田中雄一著 講談社
2019.8
- 『子育てで一番大切なこと：愛着形成と発達障害』
杉山登志郎著 講談社 2018.9
- 『親の脳を癒やせば子どもの脳は変わる』友田明
美著 NHK出版 2019.11
- 『悪の脳科学』中野信子著 集英社 2019.11
- 『スマホ依存から脳を守る』中山秀紀著 朝日出
版社 2020.2
- 『中高年ひきこもり』斎藤環著 幻冬舎 2020.1

『地形の思想史』原武史著 KADOKAWA
2019.12

『トリック=Trick:「朝鮮人虐殺」をな
かったことにしたい人たち』加藤直樹著 ころ
から 2019.6

『Q&Aでわかる子どものネット依存とゲーム障
害』樋口進著 少年写真新聞社 2019.10

『アマゾンの倉庫で絶望し、ウーバーの車で発狂
した: 潜入・最低賃金労働の現場』ジェームズ
ブラッドワース著 光文社 2009.3

『世界のニュースを日本人は何も知らない』谷本
真由美著 ワニブックス 2019.10

『学校に入り込むニセ科学』左巻健男著 平凡社
2019.11

『日本史の論点: 邪馬台国から象徴天皇制まで』
中公新書編集部編 中央公論新社 2018.8

『沈黙する知性』内田樹、平川克美著 夜間飛行
2019.11

『立憲的改憲: 憲法をリベラルに考える7つの
対論』山尾志桜里編著 筑摩書房 2018.8

『タネの未来: 僕が15歳でタネの会社を起業した
わけ』小林宙著 家の光協会 2019.9

『原発は日本を滅ぼす』青谷知己 小倉志郎 草
野秀一 後藤政志 後藤康彦 山際正道著 緑
風出版 2020.2

『英語コンプレックス粉碎宣言』鳥飼玖美子 齋
藤孝著 中央公論新社 2020.2

『太平洋食堂=THE PACIFICREFR
ESHMENT ROOM』柳広司著 小学館
2020.1

【家庭・芸術・趣味・文学一般 ほか】

『マイ・ストーリー』ミシェル オバマ著 集英
社 2019.8

『欲望の名画』中野京子著 文藝春秋 2019.8

『グレタたったひとりのストライキ』マレーナ
エルンマ ベアタ エルンマン グレタ
トゥーンベリ スヴァンテ トゥーンベリ著

海と月社 2019.10

『欲望の名画』中野京子著 文藝春秋 2019.8

『ライオンのおやつ』小川糸著 ポプラ社
2019.10

『モダニズム・ミステリの時代』長山靖生著 河
出書房新社 2019.8

『背高泡立草』古川真人著 集英社 2020.1

『三体=The Three-Body Prob
lem』劉慈欣著 早川書房 2019.7

『東京スリバチ地形散歩: 美しい3D地図でみる』
皆川典久著 洋泉社 2019.11

『熱源』川越宗一著 文藝春秋 2019.8

『交通誘導員ヨレヨレ日記: 当年73歳、本日も炎
天下、朝っぱらから現場に立ちます』柏耕一著
三五館シンシャ 2019.7

『大江戸の飯と酒と女』安藤優一郎著 朝日新聞
出版 2019.10

『音律と音階の科学: ドレミ…はどのように生ま
れたか』小方厚著 講談社 2018.5

『海峡に立つ: 泥と血の我が半生』許永中著 小
学館 2019.9

『言い訳: 関東芸人はなぜM-1で勝てないのか』
埴宣之著 集英社 2019.8

編集後記

コロナウイルスのため、さまざまな影響が出
て、皆様苦勞されていることと思います。

マスクが手に入らないのは仕方なかったにして
も、いきなり休校、トイレトペーパー、ティッ
シュペーパーがなくなる事態の急変。図書館も予
約本の貸出と返却だけで、閲覧席立ち入り禁止の
対応になってしまったところもあります。

新年度を迎えるにあたって、まずは皆様の健
康をお祈りしています。また、お忙しい中快く寄
稿していただいた薄田さん、大森先生に深く感謝
いたします。(川内)

教育図書館案内

- * 開館時間：10：00 ～ 16：30
- * 開館日：火・水・木
(2019年4月から変更になりました。)
- * 蔵書の貸出
貸出冊数：5冊／貸出期間：3週間
(利用者登録が必要です。)
- * 閉館時返却方法
図書館入口前の「ブック・ポスト」をご利用下さい。
- * レファレンス・サービス
当館所蔵の図書・雑誌、その他教育に関するお問い合わせに対応しています。
- * コピー：白黒1枚10円／カラー30円

特別コーナー

- 平和資料コーナー：
反核（原発関連を含む）・平和運動、平和教育教材、平和教育実践記録、戦争体験記など
- 日教組刊行物コーナー：
日教組教育新聞・雑誌（「教育評論」「月刊JTU」など）
- 教育総研刊行物コーナー：
年報、理論講座、ブックレット、季刊「教育と文化」、各研究委員会報告書など
- 日教組教研全国集会報告書・県教研のまとめ
- 都道府県・高教組史誌、同機関誌
- 文部科学省統計調査報告書・刊行物：
学校基本調査、国際比較、教育費、学習指導要領、指導書など
- 海老原治善文庫：元東京学芸大学教授、教育総研初代所長海老原治善氏からの寄贈書

- 鈴木喜代春文庫：児童文学者、元教育相談室相談員鈴木喜代春氏の著作本、寄贈書
- 人権・防災・減災コーナー
人権関係、東日本大震災など災害の記録等

蔵書の特徴

- 教育関係図書を中心に和書、和雑誌・新聞・洋書、洋雑誌などを収蔵しています。
- 蔵書数 約68,000冊
- 教育図書館のホームページの蔵書検索の画面から検索できます。
(<https://ilisod001.apsel.jp/kyoikutoshokan.lib/wopc/pc/pages/TopPage.jsp>)
- 千代田区立図書館のホームページ「大学・専門図書館横断検索」からも教育図書館の蔵書が検索できます。

交通案内

- 神保町駅 A1出口より徒歩3分
- 九段下駅 6番出口より徒歩7分
- 竹橋駅 1b出口より徒歩5分
- 水道橋駅西口 徒歩12分（JR総武線）

